

特集 「日本語教育における質的研究の動向」

187号特集部会

村澤 慶昭 (部会長), 河住 有希子, 木谷 直之

【本特集号の趣旨】

今回の特集号のテーマは、「日本語教育における質的研究の動向」としました。本特集は、日本語教育学会の理念体系の社会的研究課題3「日本語教育学の「学問的専門分野」としての体系的枠組みの構築」に基づきます。

近年、日本語教育学においても様々な研究手法が取り入れられ、発展してきています。そこで、今回の特集では、特にナラティブ分析によるライフストーリー研究やエスノグラフィー、複線径路等至性アプローチ (TEA)、M-GTAなどを用いた質的研究に焦点を当てた寄稿論文により、日本語教育学の研究において、それらの研究手法にはどのような可能性があるのかを考えてみたいと思いました。質的研究が日本語教育の研究分野でどのように扱われてきたかを踏まえ、コロナ禍 (COVID-19 pandemic) や世界の社会情勢の変化、科学技術の進展のもとで、今後どのように展開されていくことが期待されるかについて考える機会とできればと思います。

本特集号では本テーマについての寄稿論文を5本依頼いたしました。さらに投稿論文として4本が採用され、計9本の論文を掲載することができました。

【本特集号の内容】

本特集号で掲載する寄稿論文5本と投稿論文4本は以下の通りです。

- ・日本語教育における質的研究に求められるもの
—協働的リフレキシビティからフィールドの変革を考える— (館岡 洋子氏：寄稿論文)
- ・日本語教育におけるライフストーリー研究の展開と今後の展望
—ライフストーリー研究は日本語教育に何をもたらすことができるか—
(瀬尾 悠希子氏：寄稿論文)
- ・エスノグラフィーによる日本語教育研究 (福永 由佳氏：寄稿論文)
- ・複線径路等至性アプローチ (TEA) の鍵概念
—日本語教育研究でTEAを活用するために— (小澤 伊久美氏：寄稿論文)
- ・M-GTAによる日本語教育研究
—M-GTA 文献データベースにおける日本語教育領域論文の分析—
(根本 愛子氏：寄稿論文)
- ・理系教員が持つ留学生教育観の構造
—留学生プログラムを運営する理系教員の葛藤—
(阿久澤 弘陽・河内 彩香・佐々木 幸喜・河合 淳子の4氏：投稿論文)
- ・外国人介護士の介護施設内コミュニケーションの変容
—SCATでの分析に見られる十全的参加への過程—

(國澤 里美・和田 礼子・吉里 さち子の3氏：投稿論文)

・同期型オンライン授業継続に至る日本語教師の意識変容プロセスとその要因

—現役日本語教師へのインタビュー調査から—

(蒲田 薫氏：投稿論文)

・現職日本語教師の研修参加経路の可視化

—現職者4名が日本語教師【中堅】研修参加に至るまで—

(平山 允子・津坂 朋宏・栃丸 華緒・小坂 凜の4氏：投稿論文)

館岡論文は、質的研究全体についての論文です。まず日本語教育における最近の質的研究を概観し、質的研究の目的を確認した後、質的研究の特徴が日本語教育の実践研究等のフィールドを対象とした質的研究においても強みであり、課題ともなることを指摘しています。また質的研究においては、実証主義的な研究における信頼性に代わるものとして、研究者の前提を問い研究プロセスをたえず批判的に省察するリフレキシビティが重要であること、さらにはリフレキシビティを進めるには研究者一人の視点では不十分なため、異なった視点をもった他の研究者や調査協力者と対話をする「協働的リフレキシビティ」が必要となることを指摘しています。日本語教育分野のこれからの質的研究を考える上で、多くの示唆に富む論文です。

瀬尾論文は、ライフストーリーに焦点を当てた論文です。まず日本語教育において本格的に取り組み始めから約20年が経つライフストーリー研究のこれまでの展開を整理し、ライフストーリー研究が日本語教育に何をもたらすことができるのかを論じています。日本語教育で行われてきたライフストーリー研究は、社会構成主義的ナラティブ観に立脚した研究が中心を成してきましたが、このうち調査者がライフストーリーを編集・提示し考察するタイプの研究について、筆者が過去に行った研究を例に挙げながらその方法論と意義を示しています。日本語教育をめぐる新たな現実構成に関わるライフストーリー研究の可能性を拓げるための視座を提供しています。

福永論文は、エスノグラフィーに焦点を当てた論文です。従来は文化人類学・社会学の方法論であり、近年は日本語教育研究にも用いられているエスノグラフィーについて、歴史、研究方法としての特徴、理論的背景、複数のデータの利用について紹介しています。日本語教育が課題とする学習者の多様化と学習観の変革の観点から論じ、その取り組みの現状と、フィールドにおける筆者の体験を事例として、通常語られないエスノグラフィーの舞台裏についても、日本語教育のエスノグラフィーの社会的意義から考察しています。

小澤論文は、複線経路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach, TEA) に焦点を当てた論文です。誕生から20年を迎えたTEAは、日本語教育を含む様々な領域で関心を寄せる研究者が増えてきました。この現状を踏まえ、TEAを用いて研究する課題を設定したり、分析の手法を洗練させたりする際の一助とするために、TEAの理論面で鍵となる概念をいくつか取り上げ、解説をしています。さらに、これらを踏まえて、日本語教育研究でTEAを活用する意義や可能性、そして今後の課題について論じています。

根本論文は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, M-GTA) に焦点を当てた論文です。M-GTA 文献データベースの日本語教育領域論文を取り上げ、M-GTAの分析上の用語および分析の適切さをM-GTAのスーパーバイ

ザーの視点から検討しています。日本語教育領域論文には、視覚的な結果の提示が好まれる傾向があること、M-GTAについての誤解があると思われること、分析に必要な項目が明示されていない論文が多いこと、記述されていても分析の適切さがあいまいであること等から、M-GTAを用いて研究を行う際に必要な態度や覚悟について論じています。さらには、査読側の課題についても指摘しています。

阿久澤ほかの論文は、M-GTAを用いて分析を行った論文です。留学生プログラムの設計・運営に携わった経験がある大規模大学の理系教員の留学生教育観を明らかにするために行ったインタビュー調査について分析しています。その結果、教員が、留学生プログラムが大学の国際環境構築や留学生の日本社会への定着、知日派の育成に必須であると認識していること、その一方で、専門分野の学問は英語で遂行可能なのに対し学部教育は日本語という使用言語に関する板挟み、優秀な留学生の獲得において日本という学問環境の相対的な魅力不足や日本人学生との入り口の違いによる知識技能の違い等の複数の課題を認識しており、そうした課題の解決や支援体制の構築に腐心していることを明らかにしています。その上で、大学日本語教育の位置づけと日本語教員と専門教員の協力体制について論じています。

國澤ほかの論文は、SCAT (Steps for Cording and Theorization) を用いて分析を行った論文です。介護士自身が介護施設内コミュニケーションをどのように捉え、どのような場面で難しさを感じるのか明らかにするため、通訳者同席で半構造化インタビューを1年の間隔を置いて2回実施し、質的分析を行っています。その結果、(1) 外国人介護士は介護施設内でのコミュニケーションについて、業務遂行・人間関係の構築・対人配慮という役割を意識していること、(2) 介護施設内コミュニケーションの困難要素として専門性・言語・対人配慮があるが、相手の話をよく聴いて理解・応答する場面は経験を重ねても難しいこと、(3) 経験を重ねるにつれ、介護士の技術向上に関わる業務場面でも、人間関係構築に関わる場面でも成長が見られることを明らかにし、どのような仕組みが必要かについて論じています。

蒲田論文は、複線径路等至性アプローチ (TEA) を用いて分析を行った論文です。コロナ禍でオンラインによる日本語授業を初めて担当することとなった教師が、オンラインによる授業を今後も積極的に取り入れたいという考えに至った過程を明らかにすることで、その意識変容プロセスと、その過程に影響を与えた要因を探っています。3名の日本語教師にインタビューを行い、TEAで分析を行った結果、同期型オンライン授業継続の考えに至るまでに、3名それぞれの過程が存在したこと、その一方で、その経験や選択肢、影響を与えた要因には多くの共通点が存在したことを明らかにしています。また、同期型オンライン授業を始めたときには、「学びを止めないこと」に価値を置いていた教師たちが、次第に「学習者への最適なものの提供」に価値を置くよう意識を変容させていったことも明らかにしています。

平山ほかの論文も、複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling, TEM) の手法を用いた論文です。中堅日本語教師である自らが現職日本語教師研修に参加するまでにたどった径路を可視化したところ、研修参加に至るまでの4者4様の径路が描出され、各人の径路に影響を与えた要因が明らかにされました。それらの要因は、研修自体の特性、

各々の職場内の状況、職場外の状況の3つに分類できますが、4名はそれぞれに研修参加を阻む要因に直面しながらも、それらを乗り越えるに足る諸力を得ることで研修参加に至っていたことがわかったため、現職日本語教師研修を普及・発展させていくためには、現職日本語教師の研修参加の促進要因となり得るものを強化するとともに阻害要因となり得るものを抑制する努力が必要であると指摘しています。また今後の現職日本語教師研修の在り方に関する議論に向けて検討材料を供することも目指しています。

以上9本、質的研究の多様な手法について、またそれを用いた研究について、具体的かつ詳細に論じられています。単に量的研究に対する質的研究というような捉え方ではなく、裾野が広がっている日本語教育の研究をどのように進めたらよいのか、またどのような分析を行うことでリサーチクエスションが明らかになるのかを考える上で、非常に多くのヒントが含まれていると思われまます。ぜひご熟読いただき、ご自身の研究や今後の研究計画等に生かしていただければと思います。

なお、本誌162号(2015年)の特集「日本語教育の研究手法—「会話・談話分析」という切り口から—」でも質的研究の手法等について論じられています。併せてご覧ください。